# 詩教育への一考察

広瀬節夫

## 一

詩人の茨木のり子さんは、「詩は教えられるか」という課題について、「学校教育の場で詩は教えられるか?と問われたら、教えられるかもしれないし、教えられないかもしれないと言うしかない。双方の質ということもあれば、出会いということもある。詩に志す大人にでさえ同じことが言えるだろう。一方の極に、詩を直観的につかまえられる子がいる。一方の極にまったく詩に不感症の子がいる。(不感症の子は情操に欠陥があるなどと思ってはいけないのだ。一生詩などと無縁であるのもいいものだ。そういう人のなかに、なまなかの詩人より、はるかにポエチカルな生き方をする人もある。)二つの極の中間に、ちょっとしたヒントや、刺激によって詩に興味を持つかもしれない大多数の子がいる。その中間地帯へ向って力が注がれるわけだろう。」(『言の葉さやげ』、昭50・11・20、花神社刊、一〇一ページ)とのべられている。「教えられるかもしれない、教えられないかもしれない」というとらえ方のなかに、詩の特質をつかんだ、詩人としての考え方がきわめて象徴的に表わされている。

たしかに、詩を読む素地は、人によってさまざまであろう。感受性に富んでいる人、そうでない人、感受性をもっていてもそれに気がついていない人など、詩の受容力は三者三様である。詩とのかかわり方も、詩に親しんでいる人、詩のきらいな人、詩を心のよりどころにしている人など、多様である。詩の受けとめ方も、心に残る詩、好きな詩、いいなあと思う詩、思わず感嘆の声をあげたくなる詩など、いろいろである。詩を読むことは、まさしく、詩とそれを読む人との「出会い」そのものである。

「詩は教えられるか」、さらに、教えられるとすれば、「どのように教えるか」について考えるためには、このような、詩と読者の出会いの契機を知ることが必要であろう。

昭和五十二年十一月、F高校三年生百六名に、「私たちのアンソロジー」を編集するために、「心に残っている詩」一つずつを選ばせたことがある。しかも、それには、なぜそれが心に残っているのか、その理由を書き加えさせた。そこで、これから、そのなかにある、さまざまな詩との出会いをとらえ、詩がどのように読まれているかについて分析し、考察を加えてみたい。

## 二

はじめに、「心に残っている詩」として、どのような詩がとりあ

げられているか、その実態をまとめてみると、次のようになる。

1 初恋（島崎藤村）②
高楼（　〃　）①
2 荒城の月（土井晚翠）①
3 青い鳥（北原白秋）①
4 飛行機（石川啄木）③
拳（　〃　）①
5 一隅にて（与謝野晶子）①
6 雲（山村暮鳥）①
ゆふがた（　〃　）①
7 私の詩の中に（堀口大学）①
8 ふるさと（室生犀生）①
誰かをさがすために（　〃　）①
9 レモン哀歌（高村光太郎）③
あどけない話（　〃　）②
冬が来た（　〃　）①
さびしきみち（　〃　）①
苛察（　〃　）①
山麓の二人（　〃　）①
10 桃栗（武者小路実篤）②
11 旅上（萩原朔太郎）②
大砲を撃つ（　〃　）①
青樹の梢をあおぎて（　〃　）①
12 秋刀魚の歌（佐藤春夫）①
13 機関車（中野重治）①
日日（　〃　）①
14 雨（西脇順三郎）①
15 モナリザ（村野四郎）①
16 自然嫌ひ（小野十三郎）①
17 たまごたちのいる風景（草野心平）①
月をめがけて（　〃　）①
18 唇のような良心（山之口貘）①
19 一つのメルヘン（中原中也）①
星とピエロ（　〃　）①
汚れっちまった悲しみに（　〃　）①
帰郷（　〃　）①
20 いにしへの日は（三好達治）②
雪（　〃　）①
一点鐘二点鐘（　〃　）①
21 砲墓（丸山薫）①
病める庭園（　〃　）①
嘘（　〃　）①
22 のちのおもひに（立原道造）①
23 夏の終り（伊東静雄）①
24 峠（真壁仁）①
25 夕方の三十分（黒田三郎）①
26 微風（伊藤桂一）①
27 訓戒（会田綱雄）①

28 生長（谷川俊太郎）①
29 周囲（　〃　）①
30 或るジージー亀の告白（上林猷夫）①
31 紫陽花（金井直）①
32 わたしを束ねないで（新川和江）①
33 捜す（　〃　）①
34 白い馬（高田敏子）①
35 あとは読者がつづる詩（片桐ユズル）①
36 夕焼け（吉野弘）①
37 わたしのイソップ（寺山修司）①
38 イエスタディ（三木卓）①
39 またね（原田直友）①
40 雪の日の女王（江間章子）①
41 水鳥がとぶ（サトウ・ハチロー）①
42 今（千葉二美）①
43 迷子の風船（みつはしちかこ）②
44 少女のころ（　〃　）②
45 指定席（矢井弘子）①
46 雨のあと（三井葉子）①
47 子供らの明日（小椋佳）①
48 酒と泪と男と女（河島英五）①
49 どうしてこんなに悲しいんだろう（吉田拓郎）①
50 知らず知らずのうちに（阿木燿子）①
51 眼をとじて（山田つぐと）①
52 酔え（ボードレール）①
53 すみれ（ゲーテ）①
54 秋（リルケ）①
55 山のあなた（カール＝ブッセ）①
56 春の朝（ブラウニング）①
57 哀れなジャン（コクトー）①
58 秋の歌（ヴェルレーヌ）①
59 恋の歌（ヘッセ）①
60 鎮静済（マリー＝ローランサン）①
61 チャーリー・ブラウンという名の少年（ロッド＝マッケン）①
イマジン（ジョン＝レノン）①
君は知っている（トッド＝ラングレン）①
その他⑮

（○のなかの数字は人数）

これによれば、かなり広い範囲にわたって選ばれ、しかも、集中して選ばれたものが少ないことがわかる。選ばれた詩は、近代詩、現代詩、歌詞、翻訳詩など、種々さまざまである。なかでも、近代詩が多く選ばれ、高村光太郎や中原中也の詩が比較的に多くあげられている。フォークソングの歌詞がとりあげられているのも、ひとつの特色である。このように、詩と読者との出会いは、きわめて多種多様である。「どのように教えるか」について考える場合、まず、この出会いの多様性に注目しなければならない。

## 三

ところで、どのような詩が、心に残っているのだろうか。まず、詩にめぐりあうとき、そこには、必ず誰か人が介在するようだ。それは、教師であるかもしれないし、友人であるかもしれない。その人が、意図的に、あるいは無意識に手渡してくれた詩に、さまざまな出会いが生みだされるのである。

Nさんは、「私がいつも読むのは小説やマンガで、詩集は学校の授業のほか読んだことがないのです。ここに書いた詩も、中一の、まだ入学してまもない頃、H先生に習ったものです。」（高3女）とのべながら、次のような詩をあげている。

白い馬（高田敏子）

波の後ろを走る波……
波の前を走る波……
海には　白い馬が群れている
春の朝
白い馬は　陸に駆けあがり
少年たちの姿になって走り続ける
やがて
その若い光の一列が
みさきの方へ曲がってゆく

Sさんは、「私は詩というものをあらたまって読んだことがないので、心に残る詩というものはないのですが……。左の詩は、中三の時にA先生が紹介して下さったものです。何編かある詩の中で、一番直接的だと思いました。私は、意味のわからないような詩やまわりくどい、ごたごたした詩よりも、はっきりとしていて、すっきりと読める詩が好きなのです。」（高3女）とのべて、次のような詩をあげている。

あとは読者がつづける詩（片桐ユズル）

2歳のこどもが工事場であそんでいて
コンクリートのパイプのなかにおち
とちゅうでひっかかっていたが
救出にてまどり　すでに死んでいた
わざとしたことではなかったのだが

カーブのふみきりでエンストの
トラックをみとめ、急ブレーキをかけたが
時速60キロの電車がとまるには400キロメートルかかる
1・2輌目は川原へ転落　死者5重軽傷205
わざとしたことではなかったのだが
運転手はタイホされた

ナパーム弾はわざとやくためにある
パイナプル弾はわざところすためにある
機関銃もライフルもわざところすためにつくられているが
つくるやつはタイホされない

つくるのをやめろとビラまきしたひとがタイホされる

これらのほかに、高一の国語の時間に知って好きになった詩として、「初恋（島崎藤村）」をあげたもの、小学校の先生に教わってから妙に気に入って暗記してしまった詩として、「飛行機」（石川啄木）をあげたものなどがある。

Mさんは、友人のSさんに勧められて読んだものとして、次の詩をあげている。

酔え（ボードレール・三好達治訳）

常に酔っていなければならない。それこそは一切、それこそ唯一の問題である。汝の両肩を圧し砕き、汝を地面の方へと圧し屈める。怖るべき時間の重荷を感じまいとならば、絶えず汝を酔わしめてあれ。

さらば何によってか？酒によって、詩によって、はた徳によって、そは汝の好むがままに。ただに、汝を酔わしめよ。

もし時として、宮殿の石階の上に、濠端の緑草の上に、或は室内の陰鬱なる孤独の中に、汝が眼醒め、既にして陶酔の去って消えゆく時、かのすべて過ぎゆくもの、嘆息するもの、流転するもの、歌うもの、語るもの、風に、浪に、星に、鳥に、大時計に、問え、今は何時であるかと。その時、風と浪と星と鳥と大時計とは汝に答えるであろう、「今こそ酔うべきの時なれ……虐げらるる奴隷となって、時間の手中に堕ちざるために、酒によって、詩によって、はた徳によって、そは汝の好むがままに、酔え、絶えず汝を酔わしめてあれ！」

つづけて、この詩との出会いを、「すべての事に無気力になって、ふっと死んでしまいたいと思うことがあります。空しさに胸が広がっていって、どうにもならなくなった時、この詩を読みます。高校二年の時でした。東京のSさんから手紙がきました。〝ボードレールの『酔え』はロック的だから、読んでみるといいですよ。〟その頃、ロックとSさんに傾倒していたわたしは、すぐにボードレールの散文詩集を買って、この『酔え』のページだけを読みました。初めは、何のことだかわかりませんでした。でも、彼女が勧めるのだから、きっと何かあるのだろうと思って、思い出しては読み返すうちに、ある日、はっとしました。詩の意味が、すべてわかったわけではありません。でも、思うのです。人間は何かに酔っていなければ、生きていけないんじゃあないか、と。」（高3女）のように記している。「彼女が勧めるのだから、きっと何かあるのだろうと思って、思い出しては読み返すうちに、ある日、はっとしました」というところに、Mさん独自の詩との出会いが見いだされる。Mさんは、Sさんの勧めにしたがって、その詩を読み返しているうちに、やっとその詩的真実にふれることができたのであった。その場合、「ボードレールの『酔え』はロック的だから、読んでみるといいですよ。」という示唆が、Mさんを大きく動かしたのにちがいない。

詩とのめぐりあいは、いわば、人との出会いである。教師の、友人の、ふとした示唆を契機として、われわれは、すぐれた詩にめぐりあうことができる。

## 四

詩との出会いの典型的なものは、読み手の、その詩への共感であろう。

M君は、中原中也の「星とピエロ」をとりあげて、「僕のもってる詩集というと『中原中也』が唯一です。でも、その時その時で、自分の気持にマッチした奴がでてくるんです。僕は詩なんぞわかるような高級な人間じゃありませんが、それでも、詩を読むと『なるほど』と思い、また、『わかるなあ、この気持。』と感じ、また、とても幸福なひとときを過せることもあるのです。それあ、僕なんか、わかりもしないのに、わかったような気になっているだけかもしれません。でもいいじゃあありませんか。詩を読んで幸福になれるって、これあ素敵なことだよ。僕がこんな気持になるのは、たいていの場合、非常に打ちひしがれているときです。（陽気なときには、詩とは縁がないようです。中也君とは、そういう意味では相性がいいようです。）誰だって、なぐさめてもらいたいことがあるものです。僕はとっても甘えん坊だから、優しくされるともうたまらないのです。ばらばらとページをめくっていると、傷ついた僕の心を暖く包んでくれるような、そんな詩に出合います。この人は俺の気持わかってくれてるんだな、この人も俺とおんなじだなあ、と思うと、それあもう嬉しくって……。しかし、やがて傷口をなめ合っているような虚しさが訪れ、そして次第に俺は中也と対等にわかりあえるほど高級な人間じゃあなかったと嘆き、自分の自信過剰を罵る。沈黙が過ぎ去り、それでも誰かに救いを求めている哀れな自分を見つける。」（高3男）とのべている。M君は、中原中也の詩の中に、自分の心情を見いだすことによって、その詩をわかろうとしている。うちひしがれているとき、傷ついた心をいやしてくれるもの、それが詩なのである。

Kさんの心に残っている詩は、次のようなものである。

捜す（新川和江）

わたしは誰のあばらなのでしょう
わたしの元の場所はどこなのでしょう
日が暮れかかるのに
まだ見つからない

川が流れています　わたしの中を
みなもとは　どの山奥にあるのでしょう
せせらぎの音がつよくなるので
さかのぼって行かずにはいられません

暗くなっても　家に帰ってこない
ついに帰ってこない　女の子がいるものです
捜さないでください
彼女自身がいま
＜捜すひと＞になっているのですから

Kさんは、この詩のあとに、「数々の制約の中で、自分を見失いかける時、たとえどんなに小さな存在でもいいから、＜捜すひと＞になっていよう。捜され、心配され、手の中で育てられ、……

いいえ、そんなままで過ごすのはとても。捜せなくてもいいのです、いいえ捜せっこないんです。それでも懸命に、そう、捜していきたいんです。自分が大切だから……そうなんです。時の流れ、人々の心、あえて抗えば傷つくでしょう。流れにそって、捜されながら歩いていくのもいいでしょう。なぜ？　どうして？　どうして心配されるのがいやなの？　破ってみたいんです。大きな壁を。堅くて強い、破れっこない壁。ああ、でも。〈捜すひと〉になりたいなんて女の子の、ほんとうの淋しさに気づいてくれる人は、いるのでしょうか。」（高3女）のように記している。Kさんは、『捜す』という詩の中に、自分の姿を見いだし、それに誘われるかのように、自己の内面をさぐりあてようとしている。まさしく、『捜す』という詩への共感が、そこにある。

詩との出合いは、いわば、その詩の中に、自己を見いだすことである。それこそ、まさに、詩を読むことの極致であろう。

## 五

詩は、つねに肯定的に受容されるとはかぎらない。むしろ、否定的に受容されることもある。しかも、そのような詩の受容のしかたのなかに、かえって、詩との、ほんとうの出会いが生まれるのではなかろうか。

Yさんは、「私は、詩がいやでいやで、嫌いというより、なぜかいやで、頭の中のどこかで詩を拒否しているみたいなのです。だいたい教科書にのっている詩は、特にいやです。でも、谷川俊太郎さんに出合ったのは教科書なのです。そのときは、たいした印象もなかったのだけれど、その詩集をながめて、どことなくひかれたのです。詩には、遊びがないものが多い（と私は感じるのですが）なかで、半分遊んでいるみたいで、そんなところが気にいったのかもしれません。『生長』に関して、別に注釈はいらないと思います。詩全体が、作者の心をストレートに表わしているものはいやなのです。この詩のあそびが好きなのです。」（高3女）とのべて、次のような詩をとりあげている。

生長（谷川俊太郎）

わけの分らぬ線をひいて
これがりんごと子供は言う
りんごそっくりのりんごを画いて
これがりんごと絵かきは言う
りんごに見えぬりんごを画いて
これこそりんごと芸術家は言う
りんごもなんにも画かないで
りんごがゆを芸術院会員はもぐもぐ食べる
りんごりんごあかいりんご
りんごしぶいかすっぱいか

詩には遊びがないので嫌いだといっていたYさんは、「あそび」のある『生長』という詩にめぐりあって、目を開かれていることがわかる。

K君の選んだのは、次のような詩である。

モナリザ（村野四郎）

つまらぬ表情はやめて下さい
そのような精神の痙攣は無意味です
どうぞ其処を退ひて下さい
あなたが居るので
風景が見えない
あなたはいつも遮るのです
あなたと背景と　ぼくらの前景とを
あなたは　まったくぼくらの眼帯
そのおかげで
ぼくらの眼は充血している
あなたの拡げる　漠然とした
秘密の豊饒のうしろには
永遠など在りはしない
ぼくらが知りたくおもうのは
いたましい変化の実相
あなたが背後にかくしている
荒涼たる断崖と　新しい骨だ
大きな表情のかげで
ぼくらの表情は見えないだろうが
あなたのおかげでぼくたちには
ぼくらの風景が見えないのだ

K君は、この詩との出会いについて、「僕は詩に対してあまり好感を持てない。しかし全部の詩というわけではない。ごく一部ではあるが、僕の気持を極めて不愉快にする詩が存在するゆえに、詩全体のイメージが損なわれたのである。そのせいで、余り詩に親しんだといった記憶がない。つまり、詩に感激したという記憶もない。したがって、心に残っている詩というものもない。もちろん暗唱できる詩などあるはずもなく、わずかに、若干の定型詩と、歌詞ぐらいが、頭に浮かぶだけだ。これは、正直いって残念でもあり、情けなくもある。言葉一つ一つに託されたイメージを取りだして味わうなどという芸当には、無縁な人間になってしまったのだから。これでは、小説もよめやしない。それで、これはいかんと、無理をして安部公房なんかを読んでみたけれども、詩というものには、まだなんとなく近づけないでいる。こんな僕に、何とか理解できたのがこの詩である。その内容は散文で書けるのだが、そこに何か違いを感じるといった点で、詩と散文の差を何となく感じられた詩なのである。」（高3男）と記している。詩に親しんでいなかったM君に、どうにか理解できたのは、詩と散文のちがいを実感させる詩であった。

Yさんや K君は、いずれにしても詩を拒否しながら、一方では、ほんとうに自分の心を動かすものをさがしていたのであろう。詩との出会いは、詩を否定することによって、はじめてもたらされることがある。

## 六

すぐれた詩との出会いは、つねに、ほかの人から与えられるもの

とはかぎらない。みずから努力してさがし求めているうちに、偶然にめぐりあうものでもある。

Nさんは、いつまでも思い出に残したいものとして、次の詩をあげている。

ふるさと（室生犀星）

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都の夕暮に
ふるさとを思ひ涙ぐむ
その心もて
遠き都へ帰らばや
遠き都へ帰らばや

Nさんは、この詩とのめぐりあいについて、「かつてさまざまの詩を暗唱した。しかし、現在でも覚えてよく口ずさむのは、この詩だけだ。そして、記憶にある詩の中で、この詩の意味だけはいまだにわからない。別に不思議でも何でもない。この詩は、中学時代籍を置いていた演劇部の発声練習用のテキストの冒頭にのっていたのだ。課題は、この詩をひといきで読むこと、はじめのうちは、どうしても息が続かず、早口でまくしたてていたが、練習するとどうにかゆっくりと読んでも苦しくなくなった。こうして何十回、何百回となく口ずさんだから、多分もう忘れないだろう。そして、そのうちに意味もわかるようになるだろう。この詩は、楽しい思い出につながった大事な詩である。」（高3女）のようにのべている。Nさんは、発声練習で、いやおうなしに音読をしているうちに、その意味はわからないながらも、ひとつの詩が忘れられなくなったのである。つまり、ひとつの詩をくりかえし朗唱しているうちに、その詩の世界に没入することができたのである。このように、ふとした機縁で、ひとつの詩をくりかえして読んでいるうちに、それが忘れられない詩になるという、詩との出会いもある。

## 七

詩は、必ずしも難解なものばかりではない。平易な、とりつきやすい詩も多い。そのような詩にひかれていく読者もいる。

F君は、「ぼくは、サトー・ハチローさんの詩も好きなのだが、あのやさしくて、わかりやすい言葉というのは、堀口大学に通ずるぼくの好きなところである。この詩は、暗唱しているわけではない（どの詩もそうであるが）が見る（読む）たびに、『あたりまえである』から『なるほどな』に変っていった記念すべき詩である。」（高3男）とのべて、次の詩をあげている。

私の詩の中に（堀口大学）

私の詩の中に真実がないといふので
人たちは私の詩を好まない
私の詩は私の夢なのだが

そして夢ばっかりが私の真実なのだが
私の真実が彼等の真実と異なるといふので
人たちは私の詩の中に真実を見る事を欲しない
然し仕方もないことだ
然しそれにしても私は思はない
私の詩の中から
私の真実を追ひ出して
彼等の真実を入れようとは
人たちは私の詩を好まない
然し仕方もないことだ

この詩には、詩人としての生き方が、詩についての考え方が、きわめて平易なことばで示されている。F君は、そのわかりやすいことばをくりかえし読みながら、「私は思はない／私の詩の中から／私の真実を追ひ出して／彼等の真実を入れようとは」という語句に象徴される「詩的直実」の意味をとらえ、詩の本質にふれたのである。詩との出合いは、いわば、詩人のもつ詩的精神にふれることである。

## 八

これまでの、ささやかな分析からも明らかなように、詩との出会いは、きわめて多様である。

一つには、人を介しての出会いがある。もちろん、読書のなかで、みずからさぐりあてることもあるだろうが、教師から、あるいは、友人から紹介されて、はじめて詩を読み始めることが多い。

二つには、感性的あるいは理性的な出会いがある。感性的な出会いは、詩のこころに共鳴・共感するという肯定的受容であり、理性的な出会いは、批判的に読んでいるうちに、かえって、詩の本質をとらえるという否定的な受容である。

三つには、みずからほりおこす出会いがある。ひとつの詩をくりかえし読むことによって、その詩のこころにふれるという出会いである。

四つには、詩人との出会いがある。詩人の生き方・考え方にふれることによって、詩のこころをとらえるという出会いである。

このような、多様な出会いの様相をとらえることによって、詩の教え方について、いろいろな示唆がえられる。

① 多様な出会いをもつ読者に対して、詩の読み方を教えることは、ともすれば詩の受容を固定化しがちである。

② 指導者、あるいは、友人の、その詩から感得したものを手がかりとして、その詩のこころにふれさせることができる。

③ さまざまな詩（直接的表現による詩と間接的表現による詩、わかりやすい詩とむずかしい詩、叙情詩と社会批評詩など）にふれることによって、求めている詩を見いだすことができる。

④ ひとつの詩をくりかえし朗読することによって、詩の特質をとらえることができる。

このような、可能性と限界を見きわめることによって、はじめて、「詩のこころ」（ポエジー）にふれることができるであろう。

（静岡大学教育学部助教授）